



Title	ロマン主義詩人に於ける白鳥神話
Author(s)	上村, 邦子
Citation	Gallia. 1980, 19, p. 15-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10544
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ロマン主義詩人に於ける白鳥神話

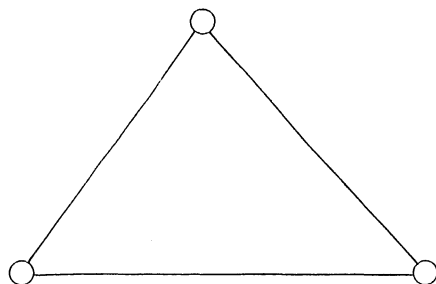
上 村 く に こ

本稿は、ボオドレエルとマラルメが白鳥神話に、正反対の方向にではあるが、根本的改革をもたらした二大詩人であるということを前提に、この二人の想像力を育んだはずの十九世紀のロマン主義詩人達にとって、白鳥神話とはどういう意味を持っていたのか、ということ、言いかえれば二人の詩人にとって白鳥神話の伝統とはいかなるものであったのかということを決めようという事を目的としている。そのために我々はアルフレット・ド・ヴィニー、テオドル・ド・バンヴィル、テオフィール・ゴーチエ、ジェラルド・ド・ネルヴァル、ヴィクトール・ユゴーの5人の詩人を選んだ。この選択は白鳥神話の継承という意味で、二人の詩人に甚大な影響を与えたと思われる詩人に限ったが、いささか恣意的であるというきらいはまぬがれない。

さて、この5人の詩人が作品の中でいかに白鳥神話を取りあつたかという事を仔細に検討してゆくと、興味深い事に気付く。つまりこの5人の詩人達のアプローチの仕方をボオドレエルの、マラルメ的、というふうに分類出来るということである。では白鳥神話発展のボオドレエルの方向と、マラルメ的方向とはどのようなものであるかを定義してみよう。

白鳥神話が相矛盾する3つの価値を内包する三角形を成形して、二重の謎を形成するということは、すでにガリア17号及び18号、さらに *Etudes de Langue et Littérature françaises* No. 36の拙論の中で詳述したので、再び論ずることは避けて、ここに図式だけ示すと次のようになる。⁽¹⁾

芸術・完成（白鳥の歌・追放・殉教のモチーフ、鳥＝船のイメージ等々）



エロス＝女性（白鳥処女）

エロス＝男性（レダ神話）

この三つの価値の中で、芸術・完成という価値が最も多くの芸術家たちによって発展させられ、それ故にまたそれから派生したモチーフも多様であるが、忘れてはいけないのが

この完成の価値が、男・女両性のエロスの活力によって常に補強されているということである。

さて、各々の詩人が3つの価値すべてに敏感だったわけではない。ある詩人は白鳥のひとつの側面にのみ鋭く反応し、それのみを発展させた。又、ある詩人は神話の内包する矛盾の謎にこだわりつづけた。唯一の価値に執着し、その部分のみを拡大した詩人の代表にボオドレエルが居り、白鳥神話の矛盾を統合しようと腐心した詩人の代表にマラルメが居る。前者と同様の傾向を示すのがヴィニー、ネルヴァル、ユゴーであり、マラルメ的傾向を示すのがバンヴィル、特にゴーチェであるといえる。まずヴィニー、ネルヴァル、ユゴーが白鳥神話のどんな面を注目したのかを検討し、次にマラルメ的なバンヴィル、最後にゴーチェを検討しよう。

(a) ヴィニー

ジョルジュ・ブランはボオドレルの「白鳥」の出典として、エレナの次の一節を引用した。

Comme de cygnes blancs une troupe égarée
Qui cherche l'air natal et le lac paternel⁽²⁾

このことによってヴィニーの白鳥は流謫のモチーフを代表していると思われがちであるが、実ははっきりとこのモチーフを扱っているのはこの詩だけであり、この詩もそれほど深い展開を示しているわけではない。そもそもヴィニーは白鳥神話に比較的冷淡であり、彼の全詩の中において、白鳥という言葉は5回を数えるのみである。そしてそれらは皆、世俗を絶った高貴な雰囲気我代表している。例えば「エロア」の中で、エロアを誘惑する惰天使は白鳥にたとえられている。状況が似ているにもかかわらず、レダ神話のレミニッサンスは微塵もみられず、流謫の白鳥のその色が濃い。

Comme un cygne endormi qui seul, loin de la rive
Livre son aile blanche à l'onde fugitive,
Le jeune homme inconnu mollement s'appuyait
Sur ce lit de vapeurs qui sous ses bras fuyait.⁽³⁾

他の二つの白鳥は船のイメージに結びついている。ひとつは二人の女性の美しさが船にたとえられているが、高貴さと完璧、無垢といった価値が前面に押し出されて、女性のエロスの価値は深くかくされている。

Comme deux cygnes blancs, aussi purs que leurs ailes
Vous passez doucement, soeurs modestes et belles,

Sur le paisible lac de vos jours bienheureux.⁽⁴⁾

さらにある詩においては、港に休息するフレガート船が白鳥のイメージに重ねられている。

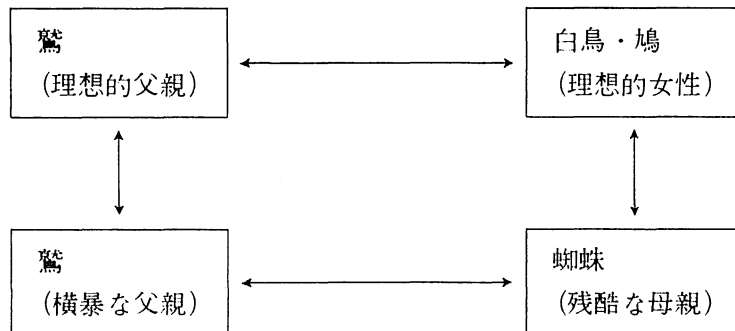
Une fois, par malheur, si vous avez pris terre,
 Peut-être qu'un de vous, sur un lac solitaire,
 Aura vu, comme moi, quelque cygne endormi
 Qui se laissait au vent balancer à demi.
 Sa tête nonchalante, en arrière appuyée,
 Se cache dans la plume au soleil essuyée :
 Son poitrail est lavé par le flot transparent,
 Comme un écueil où l'eau se joue en expirant ;
 Le duvet qu'en passant l'air dérobe à sa plume
 Autour de lui s'envole et se mêle à l'écume ;
 Une aile est son coussin, l'autre est son éventail ;
 Il dort, et de son pied le large gouvernail
 Trouble encore, en ramant, l'eau tournoyante et douce,
 Tandis que sur ses flancs se forme un lit de mousse,
 De feuilles et de joncs, et d'herbages errants
 Qu'apportent près de lui d'invisibles courants.⁽⁵⁾

このようにヴィニーの白鳥は、「芸術・完成」の価値が含んでいるエキゾチックな高貴さというものにだけ注目した詩人であるといえる。

(b) ユゴー

ユゴーも又、白鳥神話の一側面にのみ注目した詩人である。彼にとって白鳥とは純潔無垢な乙女であり、それ以外の価値は眼中になかったようである。ユゴーはひとつの広大な動物宇宙とでも呼べるものを形成したのだが、その中で白鳥がどんな位置を占めているのかということ、ボオドウェンの「ユゴーの精神分析」を参照しながら検討してみよう。⁽⁶⁾ボオドウェンによればユゴーの動物宇宙において、圧倒的に重要な位置を占めているのは鷺である。ナポレオンの紋章であったこの鳥は、その意味でも幼年のユゴーに影響を与えた。ボオドウェルは推察するのだが、どちらにせよ鷺は特に強力な男としての性を象徴している。が、ここでユゴー特有の分極化が生じる。つまり鷺は理想的な父親と横暴な父親という正反対の像をあわせ持っているのである。横暴な父親＝鷺に対するものとして、残酷な母親を象徴する蜘蛛がある。この蜘蛛にさらに対立するものとして、理想的女性を象

徴する動物が白鳥と鳩である。ここでこの4つの極を図式化すれば以下の様になる。



ボオドウェンはこの白鳥・鳩＝理想的女性の結合はさらに、幼年時代のユゴーが住んだコルディエの館の庭のイメージ、さらにもっと一般的に自然のイメージとの結合を伴うことが多い事を指摘している。実際、ユゴーの白鳥の出現場所は常に庭の池であり、そこで庭の花や彫刻と結びついて、失なわれた子供時代の至福を喚起するという図式が多い。ここにその例を4つほどあげてみよう。

Les fleurs au cou du cygne ont les lacs pour miroir⁽⁷⁾

Ce qu'elle a devant elle : un cygne aux ailes blanches,
Le bercement des flots sous la chanson des branches,
Et le profond jardin rayonnant et fleuri.⁽⁸⁾

“Les blanches statues
Assez peu vêtues
Découvrent leur sein,
Et nous font des signes
Dont rêvent les cygnes
Sur le grand bassin.”⁽⁹⁾

Or, on avait bâti, comme au temple d'amour
Près d'un bassin dans l'ombre habité par un cygne
Un théâtre en treillage où grimpaient une vigne.⁽¹⁰⁾

さて次に夕方の庭に休息する自分の二人の娘を白鳥と鳩にたとえた有名な一節を引用しよう。

“Dans le frais clair-obscur du soir charmant qui tombe

L'une pareille au cygne et l'autre à la colombe
 Belles, et toutes deux joyeuses, ô douceur!⁽¹¹⁾

このように白鳥乙女のエロスは、自分の娘や、引用の煩はさけたが他所で行なっている様に孫娘などに同化されているので、純真さが強調され、適当にカモフラージュされているが、ユゴーの官能的側面の重要な一要素であることは確かである。次の一節を読んでみればそれは明らかになる。

Je n'ai pas plus caché devant la femme nue
 Mes transports, que devant l'étoile sous la nue
 Et devant la blancheur du cygne sur les eaux.⁽¹²⁾

ユゴーはこのように白鳥のうちに白鳥処女のあどけないエロスの魅力しか見なかったと結論づけられるのである。

(c) ネルヴァル

ネルヴァルの詩作品の中には白鳥という言葉は一度もあらわれてこない。しかし「シルヴィー」の中には「入門」^{イニシアシオン}の旅を続ける話者の前に神秘的な意味を帯びた白鳥が何回か姿を変えてあらわれる。

まず第三章で話者は神秘劇を見たあと、シルヴィーの兄に伴なわれて、あたかも神秘劇で得た「入門」^{イニシアシオン}を繰り返そうとするかのように、シャアリの僧院を訪れる。そこで二人はドアにはりつけになった白鳥の彫刻をみつける。それから話者は守衛室に置かれた神秘的意味を帯びているらしい様々な家具を描写している。

Nous nous étions arrêtés quelques instants dans la maison du garde—où, ce qui m'a frappé beaucoup, il y avait un cygne éployé sur la porte, puis au-dedans de hautes armoires en noyer sculpté, une grande horloge dans sa gaine, et des trophées d'arcs et de flèches d'honneur au-dessus d'une carte de tir rouge et verte. [……]⁽¹³⁾

これについて、レオン・セリエはユゴーの「コンタンブラシオン」の中にある「ふくろう」⁽¹⁴⁾との類推から、これは十字架にかけられたキリストであると推定している。この推理は、この僧院訪問が神秘劇の退廃的繰り返しであるという事実を考えると、正しいように思えるが、それ以外にこの推定を証明する材料に欠けているので、セリエ氏の興味深い指摘を注目するにとどめよう。

次に「シテールへの旅」と題された第四章では、第三章の白鳥と対比してキリストの復

活を思わせる、輝やかなしい白鳥の飛翔が描かれる。この章で話者は故郷の島での祭りに出席して再発見された子供時代の幸福に酔う場面である。

Une surprise avait été arrangée par les ordonnateurs de la fête. A la fin du repas, on vit s'envoler du fond de la vaste corbeille un cygne sauvage, jusque-là captif sous les fleurs, qui, de ses fortes ailes, soulevant des lacis de guirlandes et de couronnes, finit par les disperser de tous côtés.⁽¹⁵⁾

祭りのクライマックスに於てそれまでかごの中に閉じ込められていた白鳥がいっせいに飛び立つというイメージは失なわれていたものの再生をすぐれて暗示するものと言える。しかもこの飛び立ちが、①ヴァロアの湖にかこまれた、②庭園の中の、③テーブルの上の、④花に埋もれた、⑤かごの中という、五重のしきりに囲まれた、いわば聖化された場所から行なわれたということも注目すべきであろう。しかしこの復活も幻滅に終る。第十四章に到って話者は「入門」が失敗に終わったことをはっきりと確認する。その時、話者をとりまく風景は「白鳥のいない湖」というふうに認識される。鳥とともに再生の可能性も飛び去ってしまったのである。

このようにネルヴァルにとっての白鳥とは、ノスタルジアの色合いを帯びた、神秘的な聖的な鳥であるといえる。

(d) バンヴィル

バンヴィルの詩作品の中には白鳥という言葉が頻出し、その44回という頻度から言えば5人のうちで最も多いのであるが、そのことから、必らずしもバンヴィルの白鳥が濃密な象徴の価値を荷負っていると言うことは出来ないのである。先に述べた3人の詩人が白鳥神話の唯一の価値を拡大させたのに対してバンヴィルは2つの対立する価値、すなわち芸術・完成を象徴する白鳥という価値と、官能的動物という価値を扱っている。しかしバンヴィルの特徴はこの2つが相矛盾するということに全く頓着していないということで、芸術を代表する白鳥は殉教によって名誉を全うし、エロスを代表する白鳥もひたすら官能的であるにとどまっている。このようにバンヴィルが双方の相関関係に注目せずに、楽観的に二つの至福をうたいあげたということは、バンヴィルの白鳥神話のうけとめ方が皮相であるとの印象を避けがたいものにする。しかしバンヴィルが白鳥神話に新しくつけ加えたものも、ないわけではない。それがなんであるかを、まず芸術・完成＝白鳥の価値を示す諸詩篇から検討してゆこう。バンヴィルはこのうち特に流謫・殉教の白鳥というモチーフを発展させた。まず1875年出版の、その題名も「流罪の人々」という詩集を見よう。その中の「白鳥のあやまち」と題される寓話風な詩の中に、白鳥は無理解なからすに追放される高貴な犠牲者として出現している。以下引用するのは、からすが白鳥の白さをあざけているせりふである。

Cuisinier, garde ton couteau
 Pour ce Gille, cher à Watteau !
 Accours ! et moi-même que n'ai-je
 Le bec aigu comme un ciseau,
 Pour percer le vilain oiseau
 Barbouillé de lys et de neige !⁽¹⁶⁾

この部分はラ・フォンテーヌの「白鳥と料理人」のパロディーであると思われる。この作品は、目の悪い料理人が、お城の堀の白鳥を鶯鳥のひなと取りまちがえて、今にも白鳥の首を切り落そうとした時、瀕死の白鳥が妙なる「白鳥の歌」を歌ったので、目の悪い料理人もやっと自分のあやまちに気付くという話である。⁽¹⁷⁾ バンヴィルはこのユーモラスな料理人をもっと残酷なものに変えて、白鳥の悲劇性を強調している。詩の終りに白鳥ははげたかに殺されるが、天使が降りてきて白鳥は救われるという筋立てである。この様に詩の内容は伝統的であるが、ラ・フォンテーヌや、ワットーなどを援用することによって現代的なものになっている。バンヴィルの白鳥の特色はこの様に内容は伝統的でありながら、現代的な衣をまとっているというところにある。流謫の白鳥は当然迫害の高貴な犠牲者となるのだが、バンヴィルは様々な小道具を駆使して、現代的味つけに成功している。漂泊の白鳥は例えばミュッセにたとえられる。

Musset, beau cygne errant, chante en pleurant⁽¹⁸⁾

死んだ女性や、殺された女性も又、彼女達が受けた迫害の故に白鳥になぞらえられる。後に分析する官能的女性とは全く異質なものである。まず、ある病死した女性へささげられた詩では、

O délices ! je respire
 Tes divines tresses blondes !
 Ta voix pure, cette lyre,
 Suit la vague sur les ondes,
 Et suave, les effleure,
 Comme un cygne qui se pleure !⁽¹⁹⁾

という様に女性の美しさを聖化しているということに気付く。プロシア軍兵士に犯され、殺された女性達も同様の聖化を受ける。

Plus blanches qu'une aile du cygne,
 Elles vous montreront, vous, dis-je,
 D'un doigt vengeur qui vous désigne⁽²⁰⁾

夫に首を締められるデスデモナも又、白鳥になぞらえられ、劇場が実現する奇跡のひとつにあげられる。

C'est (le Théâtre), le doux cygne éploré
 La pâle Desdémone [.....]⁽²¹⁾

この様にバンヴィルの殉教の白鳥は、ワットーやシェクスピアなどの現代的味付けのもとに、伝統的な白鳥神話が繰り返されて居り、偉大な美に達するためには、特に苦しみに洗われなければいけないという苦悩主義がみられる。その点ボオドレエルに影響を与えたと言えるが、彼とバンヴィルが根本的にちがうところは、バンヴィルが迫害された者の芸術的あるいは宗教的救いを深く信じているということであり、ボオドレエルは、そういう救いをきっぱりと否定するのである。

次に官能的白鳥の観察にうつろう。興味深いことに、詩人は、画家達が描いた豊満な裸体を讃美するために白鳥のイメージを援用することが多い。そのためたいへん大胆で視覚的なものになっている。「ルーベンスの女」と題された詩を読んでみよう。

Ton cou, blanc comme un cygne,
 Montre une douce ligne
 D'un suave dessin;
 Et ton beau sein,

 Ton sein lourd, où se pose
 Un divin rayon rose,
 Est fait d'un marbre dur
 Veiné d'azur⁽²²⁾

同じ詩の最後の方で、面白いことに白鳥は性を転換してレダを誘う男性になっている。

C'est Lèda qui s'indigne
 Sous le baiser du cygne
 Et le cherche à son tour
 Folle d'amour;⁽²³⁾

「泉」と題された詩はアングレによって描かれた、白鳥とレダの交歓の讃美である。

C'est dans ton flot riant, à l'ombre de la vigne,
Que Lédä frémira sous le baiser du cygne,
Pâle d'horreur, serrant les ailes de l'oiseau
Sur sa poitrine folle où l'ombre d'un roseau
Se joue, et sur le lit de fleurs que l'onde arrose
Mordant un col de neige avec sa lèvre rose⁽²⁴⁾

「雪の交響曲」と題された白づくしの美を讃美した詩の冒頭の節では、湖・蒼ざめた太陽・樹氷などを背景に官能的白鳥が描かれる。

Les lacs sont habités par la troupe des cygnes,
Qui semblent frissonner sous nos soleils pâlis,
Et l'ombre de feuillage a les marbres insignes
Dont un grêle rayon baise les pieds polis⁽²⁵⁾

次の章で、やはり白づくしの美を讃美したゴーチェの「白色交響曲」を検討するが、彼が白の純粹さに圧迫される恐怖を告白するのに対して、バンヴィルにおいては対照的に、冷たさも純白さも、ひたすらエロスをかきたてる役を荷負っているのである。このようにバンヴィルは芸術の価値についてもエロスの価値についても、その達成の至福を主題にしている。このバンヴィルの特色である楽観主義は、ボオドレエル、ゴーチェ、マラルメなどによって徹底的に否定され、爾来白鳥神話の不可能性を歌う傾向が逆に伝統になってゆく。従ってバンヴィルは「幸福な白鳥」を謳歌した最後の詩人であると言えるであろう。

(e) ゴーチェ

ゴーチェの白鳥も官能の動物であるが、そこにはバンヴィルの大胆さも、ユゴーの無邪気さも見られない。ゴーチェは白鳥のもつ官能美にひかれながら、それを実現する事の不可能性を嘆いているのである。この意味でゴーチェはマラルメの先駆けをなしていると言える。

まず「白色交響曲」を引用しよう。これもバンヴィルの「雪の交響曲」と同様、純白の美を列挙して讃美するという趣向であるが、その冒頭にあげられているのが、北ヨーロッパの白鳥乙女の伝説である。

De leur col blanc courbant les lignes,
On voit dans les contes du Nord,

Sur le vieux Rhin, des femmes-cygnés
Nager en chantant près du bord;⁽²⁶⁾

しかし、この詩の最後に到ると、白さは雪崩に埋もれたスフィンクス、星のやどる氷河の守り人などになぞらえられ、詩人はこの完璧さに、いささかも活気を与えられない自らの無能さ、白の美しさの冷たさを嘆くに到っている。

Oh ! qui pourra fondre ce coeur !
Oh ! qui pourra mettre un ton rose
Dans cette implacable blancheur !⁽²⁷⁾

バン・エルデは、「レスブリ・クレアトル」に発表したこの詩の解釈において、ゴーチェの作品の中には、白色と赤色が興味深い弁証法を形成していると指摘した。⁽²⁸⁾ 彼によるとゴーチェは、大理石に結晶するような純白と、若い活力を示す赤の調和を生涯追求して居た。バラ色が詩人との理想の色となるのは、このためである。従って「白色交響曲」は白色をバラ色に変えることの出来なかった、詩人の失敗の告白の詩であると見做すことが出来る。

「ラ・ディヴァ」と題された詩は、詩人がオペラ座で見惚れたものの、声もかけずに別れた見知らぬ美女の讃歌であるが、詩人はこの対象を、まるでモデルをながめる画家か彫刻家のように眺めるだけで、決して官能の「赤」を付け加える事が出来ない。

J'admirais à part moi la gracieuse ligne
Du col se repliant comme le col d'un cygne,
L'ovale de la tête et la forme du front,
La main pure et correcte, avec le beau bras rond ;
Et je compris pourquoi, s'exilant de la France,
Ingres fit si longtemps ses amours de Florence.⁽²⁹⁾

エプスタンはゴーチェにみられる白＝美、とそれに対する赤＝感性の矛盾対立はそのままマラルメが悩んだ不調和と同じものであることに注目した。⁽³⁰⁾ マラルメとゴーチェはいわば同じミューズに魅入られたとも言うべきであり、このミューズはその純粋さ故に近づくことが不可能であり、常に「死」がミューズとの結合をさまたげるものとして介入してくる。ただしゴーチェの場合には、詩作品の中には「死」はあられせず、むしろ小説の中に「死」の介入が頻繁に見られる。この美と活気の不調和から、不安・罪悪感・無力感などの、青年マラルメに共通したドラマが生ずるのである。このようにゴーチェは初期マラ

ルメの白鳥をそのまま先駆けていると断言出来る。



以上、5人の詩人における白鳥神話の位置を観察してきた。我々はあらためて白鳥神話の多様さに驚かざるを得ない。ヴィニーにおける船＝白鳥の高貴なイメージ、ネルヴァルのノスタルジックで神秘的な白鳥、ユゴーの無垢な白鳥処女、バンヴィルの殉教者としての白鳥、あるいは豊満なエロスとしての白鳥、生命力の消失に脅かされるゴーチェの白鳥など。ボオドレエルはロマン派によって準備されたこの様々な価値のうちから、ことさらエロスの面をすべて排し、さらに殉教、流謫、高貴といった白鳥の伝統的プラス面を滑稽に変えてしまった。彼は伝統的救いはいり得ないが、この滑稽の中にこそ現代的な価値の創造の可能性があるということを有名な「白鳥」の中で示した。反対にマラルメは5人の詩人達によって示されたすべての価値に敏感に反応し、マラルメ一流の斬新な白鳥を所々に創造していった。しかしマラルメも三つの価値を統合する白鳥を創造したとは言えない。マラルメをもってしても、白鳥によって問われた謎は解けなかったと言うべきであろう。それ故にこそ、白鳥という象徴は、依然我々を魅了する事が出来るのである。

注

- (1) 上村邦子；“ボオドレエルにおける白鳥神話の位置”，大阪大学フランス語フランス文学会発行・GALLIA XVII号，“初期マラルメにおける白鳥神話”，GALLIA XVIII号，“*La situation de Petit Air II dans le mythe personnel du cygne chez Mallarmé*”，*Etudes de Langue et Litterature françaises*, Société Japonaise de Langue et Littérature Françaises, Tokyo, Japon, 1980.
- (2) Charles Baudelaire; *Les Fleurs du Mal*, José Corti, 1942, P. 449.
- (3) *Oeuvres complètes* d'Alfred de Vigny, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1960, *Eloa ou la Soeur des Anges*, P. 71—72.
- (4) *Ibid.*, P. 252, 《Comme deux cygnes……》.
- (5) *Ibid.*, P. 154, 《La Frégate la sérieuse ou la plainte du capitaine》.
- (6) Charles Baudouin: *Psychanalyse de Victor Hugo*, Armand Colin, 1972, P. 120.
- (7) *Oeuvres complètes* de Victor Hugo, tome I. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1968, P. 964, “Les Voix intérieures”.
- (8) Victor Hugo: *La Légende des siècles*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1950, P. 437. “La Rose de l'Enfance”.

- (9) *Oeuvres complètes* de Victor Hugo, tome III, P. 214. "Les Tuileries".
- (10) *Ibid.*, tome II, P. 523. "La Fête chez Thérèse".
- (11) *Ibid.*, tome II, P. 489, "Mes deux filles".
- (12) *Ibid.*, tome III, P. 641, "Dans le jardin".
- (13) *Oeuvres* de Gérard Nerval, tome I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1960, P. 250.
- (14) Léon Cellier: *De "Sylvie" à Aurélia*, Commission, 1971, P. 19–20.
- (15) *Oeuvres* de Gérard Nerval, tome I, P. 257.
- (16) Théodore de Banville: *Les Exilés, Les Princesses*, Lemerre, 1875, P. 103. "Les Torts du Cygne".
- (17) Jean de la Fontaine: *Fables*, Editions Lidis, 1961, P. 169.
- (18) Théodore de Banville: *Occidentales*, Lemerre, 1875, P. 158 "L'Aube romantique".
- (19) Théodore de Banville: *Les Exilés, Les Princesses*, P. 175, "L'Enamourée".
- (20) Théodore de Banville, *Idylles prussiennes (1870–71)*, Lemerre, P. 20 "Les Femmes violées".
- (21) Théodore de Banville, *Occidentales*, P. 229, "Le Théâtre".
- (22) Théodore de Banville, *Les Exilés, Les Princesses*, P. 68 "Une femme de Rubens".
- (23) *Ibid.*, P. 72.
- (24) *Ibid.*, P. 99 "La Source".
- (25) Théodore de Banville, *Les Cariatides*, Lemerre, 1877, P. 261 "La Symphonie de la neige".
- (26) Théophile Gautier, *Emaux et camées*, Hachette, 1927, P. 25. "Symphonie en blanc majeur".
- (27) *Ibid.*, P. 27.
- (28) John Van Eerde "La Symphonie en blanc majeur' An interpretation, " in *L'Esprit créateur*, vol. III, no. 1, Spring, 1963, pp. 26–33.
- (29) Théophile Gautier, *Albertus, La Comédie de la Mort, Poésies diverses, Poésies nouvelles*, Charpentier, 1845, P. 202. "La Diva".
- (30) Edna Selan Epstein "The entanglement of sexuality in Aesthetics", *Nineteenth Century French Studies*, vol I, 1. no. 1, Fall, 1972, P. 5–20.